



連載

博聞意伝

世代を超えて未来を語る

第15回

小松としゑ

〔聞き手〕

澁澤健

(エデュケア・インターナショナル Inc.)

(コモンズ投信会長)

代表取締役)

『笑字帖』に書きとめた言葉のスケッチ

澁澤 今回の「博聞意伝」は、小松としゑさんにご登場いただきお話をうかがっています。そもそも私が『ほぼづゑ』の同人に加わるきつ掛けを作って下さったのは小松さんでしたね。二〇〇六年に小松さんと福川伸次さんのご推薦で同人となりました。小松さんが入られたのは何年でしたか。

小松 私は二〇〇四年です。奥村有敬さんと中村喜久美さんにご推薦いただきましたが、ものを書くということは大変勉強になるから、というお導きだったと思

います。奥村さんからお声を掛けていただいた折は、私は日米協会の評議員でプログラム委員をしていると
きで、ちょうど奥村さんが『長唄名曲30選』（和英併記版
書肆フローラ 二〇〇四年）という本を出されたときでした。
日米協会のパーティーにおいてになった奥村さんとお
話する機会があり、『ほほづゑ』に誘われました。

瀧澤 小松さんは、『ほほづゑ』に写真を添えた詩篇
（「言葉のスケッチ」）を書かれていますね。

小松 私は、特集テーマに寄稿される方々のように、
筆力も知識体験が豊かではないせいか、与えられた
テーマに基づいて書くということが出来ません。ただ
俳句は以前からやっておりますので、俳句を寄稿し
ようと思いましたし、文字通り「言葉のスケッチ」と
しての詩篇を書いていましたので、俳句と詩篇を毎号
必ず寄稿しております。『ほほづゑ』のような自由な
ものを書ける場は他にはありませんからね。

瀧澤 私などは俳句や詩ということになると全くイ
メージが結ばれませんが、小松さんはどのようなイン
スピレーションで書かれていますか。

小松 私は、若い頃の一時期を除いて既存の俳句の門

を叩いたことはありません。俳句は一番身近なポエ
ムよというように、身近に感じたことを季語に乗せて
詠よんでいるというだけです。でも考えると恐ろしいこ
とで、一切どなたのチェックも入らないまま載ってし
まうというのですから（笑）。だから、常に素すのまま
の私が見られている」という思いです。ただ俳句は父
がやっていたという親しみがありましたね。

瀧澤 「言葉のスケッチ」というのはどのようなコン
セプト（観点）で書かれているのですか。

小松 私は以前から『笑字帖』という自前のノートに
折々の感慨を言葉にして書き留めています。この「笑」
という字を使っているいろいろ考えています。「笑」とい
うことは喜怒哀楽とともに人間だけが持ち得たことで
あり、笑うことも泣くことも、人間であるゆえに持ち
得た感情であると思っています。これは文字を書くう
えで大切なことだと考えています。

瀧澤 殊更に文章を綴るということになると、頭の中
が真っ白になったりしますが、私も日常の、街中や電
車を待っているときなど、ふっと思い付き、気に留め
たことを記す備忘帖を持ち歩いています。

小松 私も今持っています。そうでないと忘れてしま
いますし、思い至った時の感情が残りません。でも咄
嗟に書き綴る、例えば句会などのように、機に応じて
句を詠んだり、文章を綴るなどということは、私は出
来ないので。苦手ですね。……一度だけ吟行に参加
したことがあるのですが、書かなければいけないとい
う思いが先に立って、うまくいきませんでした。それ
以来そういうところには行っていません（笑）。

瀧澤 昼間よりも夜の方が書きやすいとか、目覚めた
時がいいとか、文字を綴りやすいパターンとかはあり
ますか。

小松 そうですね、文章を綴るのは、朝、午前中より
も午後とか夜の方が多いですね。私は空とか雲とか自
然を眺めるのが好きですが、月を眺めることも好きで
す。ただ同じ風景を同じ時間帯に眺めていても、同じ
趣きということはありませんね。そういった微妙な差
異を楽しみたいという感覚が自分の中にはあります。

瀧澤 空とか雲とかをご覧になっていて、どういった
感慨に浸られるのですか。……例えば空をご覧になる
として、お好きな時間帯はありますか。

小松 早朝の曙の頃か、夕暮れ時ですね。仕事や旅行
で地方に赴いて美しい澄んだ空も眺めますが、東京育
ちで、東京には東京の空があると思いますし、東京の
そういった空を眺めるのが好きですね。

瀧澤 早朝と夕暮れ時では光の感じも違いますね。夕暮
は暖かみを感じますし、早朝は空気がクリーンと言
いますか、透明感があります。

小松 出掛ける用事があるって早く起きた時などは、必
ず空を見上げます。そして、クリーンな空気と光を
吸って、よしっ… という気分になります。

瀧澤 私も時間帯の違いに伴う光の表現演出の差を実
感したことがあります。早朝あるいは夕暮時の斜光は
風景を立体的に浮き立たせますね。そのことは、かつ
てグランドキャニオンで実感しました。最初に訪れた
時は夕暮れ時だったものだから、森を抜け目の前に広
がった大地が赤く染まって、しかも斜光を浴びて溪谷
の凹凸が立体的に浮かび上がり、息を呑む様な光景で
した。そして次に訪れた時は真昼間だったので、
上からの光のもとで風景全体がフラットな印象を受け
ました。もちろん壮大な景色であるのに相違はないの

ですが、最初に受けた印象とは随分違ったものでした。
小松 陰影の演出ということなのでしようね。その時

間帯による光と陰影、そしてその時の風の具合もある
でしょうし、また受けとめた時の感情の起伏の具合も
あるでしょうね。

澁澤 小松さんは、ご自身で自己評価すると、どのよ
うな成長過程を過されましたか。

小松 ごく普通の女の子でしたが、いつも「なんでか
な？」という思いがありました。学校の授業において
も、数学は求める答えは明確でしたが、文学といいま
すか、本を読むことが好きでしたので、常に「なん
で？」という疑問を抱いていました。「なんで？」「ど
うして？」と聞くものですから、親からは「理屈つぽ
い」と言われていました。家には本が沢山ありました。
子供には訳の分からない謡の本などもありましたね。

澁澤 お母さんはどういう方でしたか。

小松 母はごく普通の主婦であり母親でしたね。昔の
人はどちらも同様でしょうが、我慢強い家庭人でした
ね。私の少々理屈っぽいところは父親似ということで
しょうか（笑）。

人と人との出会いのご縁

澁澤 東京で生まれ東京で子育てになられたというこ
とでしようか。

小松 そうですね、ごく一般的な家庭でしたね。贅沢
をするようなことは一切ありませんでしたし、生活に
困っていたということもありませんでした。ただ、ど
ういう訳でしたか、私の進学する学校の選択などは、
すべて父が決めていました。高校を卒業する頃も。それ
まで親に逆らうようなことはなかったのですが、初め
て反発したのがその時です。そのお蔭で、以来勉学す
る道も仕事先を探すことも全部自分でやることになり
ました。

私が勤め先として見つけたのは、創業から三百年余
を経た老舗の服部紙商事（現国際紙パルプ商事）とい
う会社でした。紙商の業界というのは現在もそうです
が古くからの店が多く、服部紙商事も江戸期（万治二
年）の創業です。私が服部紙商事の求人に応募した時
実は当社としては初めての求人です、それまでは縁故で
人を雇っていたようです。素性の分かった者を雇うと



小松としゑ氏

いうことでしょうか。ともかくその折二十人くらいが入社しました。一通りの研修を受けた後に、私自身は営業業務に行きたかったのですが社長室の秘書勤務として配属されました。

澁澤 当時の社長はどなただったのですか。

小松 服部健次郎社長です。『ほほづゑ』の同人であられた服部禮次郎（二〇一三年二月逝去）さんと服部健次郎社長は同じロータリークラブでご一緒でした。

服部禮次郎さんは服部紙商事にもお見えになったことがあり、後日『ほほづゑ』の同人懇談会でそのことをお話して、懐かしく歓談させていただきました。

当時はまだパソコンもメール通信もない時代でしたので、秘書というお仕事は、社長を訪ねて来られた方々の情報整理からファイルの作成、通信文の作成送付、受け取った通信、文書の整理、管理というものでしたが、私なりに工夫して一生懸命務めました。そして、六年間勤めた会社を、結婚を機に退社しました。当時は、結婚をするというと女性は退社しなければなりませんでした。それから、退社とともに学ぶということを考え始めました。

澁澤 結婚を機に退社されたということですが、現在のビジネスアドバイザー、コーディネーターのお仕事へのステップということだったのでしょうか、どのようなことを勉強されたのですか。

小松 これからのビジネスは語学力、ことに英語が必須だと思いましたので、英語の講座を探したり、教材を取り寄せて勉強しました。後に親しくさせていただきましたいた大竹美喜さんからもアドバイザーさされました。

澁澤 大竹美喜さんとはどういうご縁で知り合われたのですか。

小松 国会議員のクリスチャンの会がありますが、年

に一度の大きな集いで、ある方から大竹さんを紹介されました。その時は名刺の交換だけのつもりだったのですが、翌日秘書の方から電話があり、「昨日大竹とお会い戴いた小松さんですね。大竹からの依頼として、講演をお引き受けただけませんか」ということでした。当時、アライアンス（企業間提携）のお手伝いをしていましたので、どなたか講演者を紹介して欲しいというご依頼かと思いました。でもお話は、私に「きらめき未来塾」で講師をして欲しいということでした。瀬澤「きらめき未来塾」は出来てどのくらいになりますか。

小松 アフラック（アメリカンファミリー生命保険）の創業者の大竹美喜さんが二〇〇五年に「次世代を担う高校生のための未来塾」（広島県庄原市）を開催されたのが始まりですから十年目になります。そして私が講師をお引き受けしたのは五年目の時（二〇一〇年）です。私が英語に関わっているということ、「英語で講演をして下さる方を紹介して欲しい」ということでした。岐阜県飛騨市で行われた「きらめき未来塾2010」の時です。アメリカ大使館の広報課にお願いし

て大阪から講師としての人を派遣していただくことになりました。以来英語の講師の担当ということになっています。

瀬澤 「きらめき未来塾」のことをもう少し詳しくお話ししてくださいませか。

小松 「きらめき未来塾」（二〇一一年四月にNPO法人認定）というのは、大竹さんが若い人を育成しようという主旨で広島で始められた、高校生を対象とした塾です。

瀬澤 私が講師として伺ったのは二年前でしたね。

小松 二年前です。夏休みに合わせて四泊五日の日程で淡路島で行なった「きらめき未来塾2013」ですね。高校生が対象ですから、講師も若い人をお呼びしようということ、いろいろな分野の方に来ていただいています。

瀬澤 十年目ということは、一期生の人たちは二十七、八歳になるということですね。

小松 そうです。ですから「きらめき未来塾」の卒業生たちのセミナーも別途持っています。それで塾のお手伝いをして下さっているボランティアの人たちが

いますが、みんな塾の卒業生たちです。

澁澤 そもそも「きらめき未来塾」に来ていた高校生たちはどういう基準で選ばれて、どういう経路で来ていたのですか。

小松 ホームページに掲示し、開催地域の商工会議所とか各学校に募集を掛けて、学校などから応募して集まってもらいました。塾への交通費は自前ですが、受講費、宿泊、食費すべて無料です。

澁澤 文京学院大学という文京区にある大学の客員教授をしていた時に、大竹喜美さんも客員教授をされていて、大竹さんにはそこでお会いしたことがあります。二〇〇五年頃でしたか、すると「きらめき未来塾」が始まる頃ですね。

小松 その頃大竹さんは、いくつも教育関係に関わっておられましたから。大竹さんの考え方はフレキシブル（柔軟）で温かいですからね。結局人と人が触れ合って物事を起こす、どんな事業も必ず一人か二人で始まっているのですから、もともになる人が何を考えるかということが、ものごとが始まり進展していく上で大切ですね。そのことは大竹さんのお仕事を通して

考えさせられましたね。お金を得るということは大切なことですが、要はそれをどうやって果たすかということですね。

澁澤 お金は必要で大切ですが、目的ではなく手段だと思えますね。私はお金は「水」みたいなものだと思います。なければ喉が渴きますが、全くないと死活問題です。沢山あり過ぎて、がぶがぶ飲んでいると身体を壊すし、泳ぎ方を知らないで溺れてしまいます。そして、お金に色は着けられないと思ってしまう。よつては「お金に色は着けられる」と思っています。小松 人と人との出会いも、お金との出会いもご縁ですからね。……ご縁と言えば、澁澤さんとの出会いも奇しきご縁ですね。

澁澤 そうですね。詳しい経緯をたどると、どういうご縁でしたかね。

小松 今日対談させていただくというので思い起こしていたのですが、澁澤さんとのご縁のそもその起こりは、澁澤さんのお父様の従兄弟いとこにあたる渋谷裕さんですね。渋谷裕さんとはイグナチオ教会で存じ上げていて親しくさせていただいています。そしてある

時、アメリカに移住されていた澁澤さんのお父様を、裕さんが紹介して下さいました。その頃私の娘がアメリカのボーディングスクール（全寮制の寄宿学校）に行っていたこともあって、アドバイスをいただきました。その折にお父様から澁澤（健）さんのことをお聞きし、直接お会いしたのはその後、やはり『ほぼづゑ』に推薦して同人になっていただいている藤原洋さんのインターネット総合研究所とのシンポジウム（「インターネット時代における医療と教育を考える」二〇〇六年）に、澁澤さんにパネリストとしてご出席をお願いした時でしたね。

澁澤 そうですね。インターネットと医療のシンポジウムにパネリストとして参加させて頂きました。小松 当時インターネットが入って来たばかりの頃で、私はインターネット関連のお仕事をしており、インターネット総合研究所を立ち上げられた藤原さんがインターネットと医療を直結させようと考えておられたこともあり、シンポジウムを共催することになりました。そのシンポジウムには財団法人洪沢栄一記念財団にも後援していただいています。

澁澤 インターネットと医療のシンポジウムの他にもう一つ、相馬雪香先生関連の催しがありましたね。小松 私が関わった本で、聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生と相馬雪香先生との対談を纏めた本『明日の日本への贈り物 91歳の医学界のリーダーと平和活動家が語る』（毎日新聞社 二〇〇三年）の出版記念会がありました。

そして、洪沢財団関係で言うと、洪沢裕さんから勧められて財団の機関誌『青淵』（青淵は洪沢栄一の雅号）を読むようになりました。誘われて龍門社（二〇〇三年に財団法人洪沢栄一記念財団と改称）にも入りました。井上潤さんが洪沢栄一史料館の館長になられた時（二〇〇四年十一月）でした。

当時私は東京シビタンクラブというのを立ち上げていました。これはアメリカのアラバマ州にあるシビタンインターナショナルをアーンスト&ヤングのCEOをされた西本嘉雄氏が日本シビタンクラブをつくりました。ただそれは東京ではなかったもので、「小松さん東京に作って下さい」と依頼されてお手伝いすることになりました。お手伝いのつもりが中心的な役割

(会長 一九九七〜二〇〇六年)を担うことになりました。シビタンクラブというのはアメリカでは、ロータリークラブ、ライオンズクラブなどと並び称されるコミュニティサービスを目的としたものです。東京シビタンクラブの具体的な活動としては、まず二十五名ほどの会員を募って、勉強会と称して各分野から講師をお招きし、毎月一回六年間講演会を開催しました。これの最初の頃、洪沢裕さんに手伝って貰っていました。洪沢栄一のお話や龍門社のご紹介もしていただきました。

アライアンス・コーデイネーター

澁澤 いろいろ手掛けておられますが、現在のお仕事の形態としてはどのようなものですか。

小松 コミュニケーション・アライアンス事業で、アライアンス・コーデイネーターをしています。私自身中身がなんだか分かりません(笑)。いつも、どなたからも「どういうお仕事ですか?」と聞かれるのですが、明確にお答えできません。エデュケア・インターナショナル Inc.という株式の社名登記をアメリカで

行い、日本法人にして十年になりました。

澁澤 なぜアメリカで登記されたのですか。

小松 安いからです。

澁澤 デラウェア州の会社法(安価・簡便・手厚い保護)ですか。

小松 そうです。デラウェアで登記しました。多額の資本金が要りませんし、大きい仕事をする訳ではありませんので。その前に、社名のエデュケア・インターナショナルというのは、ずっと英語を教えていたからなのです。フォニックス学習法ですよ。個人レッスンを始めて、幾人からも頼まれるようになり拡がっていききました。自分の経験も踏まえて、フォニックス学習法をやると英語の習得が早いのに、なぜ日本の英語教育はやらないのだろうと思っていました。

澁澤 それは受験のための英語教育だからでしょうね。ただ、ずっと東京で暮らしておられたのに、どうしてそんなに英語に強い関心を持たれたのですか。

小松 受験のための英語の授業は私のやることではないし、それと英語は、好き嫌いは別にしてどこの国でも使うということが分かっていたから、英語を

自在に使えるようになりたいのに出来ない」という声を聞くと、アメリカと日本を歩き来している自分の経験を出来る範囲で分かちたいと思いました。

瀧澤 私は小学生の頃、アメリカの社会にいきなり入り込まれましたので、私の英語は勉強のための英語ではなく、サバイバルのための英語でしたから、最初は想像の世界でしたね（笑）。おそらくこういうことを言ってるのだらうな、というように。二年生、三年生ではまだ駄目で、四年生くらいになってやっと会話が出来るようになりました。

小松 先ほど、私の娘がアメリカのボーディングスクールで学んだと申し上げましたが、その前に修道会がやっているインターナショナル・スクールで学ばせました。それは生きた英語を身に付けさせたいと思ったからです。これからの人は言葉は二カ国語は必要、そして教育の機会を与えるは親の役目と思っていました。瀧澤 小松さんの、そのポジティブシンキング（前向きな思考）はどこから来ているのですか。

小松 なんでしょね、根が単純なのじゃあないでしょう。幼いころから、なんでだろう、どうして

だろう」という思いが強くなりましたので、思い悩む前に課題が先に行ってしまうのではないでしょう。

瀧澤 この対談は最後に次世代に向けたメッセージをいただいているのですが、今日はすでにいろいろメッセージがありました。そこで敢えて言葉にしていただけとしたり、どのようなメッセージをいただけますか。小松 私の座右の銘で「出会いに学ぶ」という言葉があります。人生いろいろな出会いがあると思いますが、そこから様々なことを学んで欲しいと思います。出会いの対象は老若男女に関わらず、自分以外から学べることの有難さを大切にして欲しいです。そして感謝ですね。出会い、学び、感謝です。私の仕事は、誰かと誰かを繋ぐ」というアライアンスの仕事ですので、このことは大事だと思っています。

そして、好きな言葉の一つに、ファミリー FAMILLY があります。Father And Mother I Love You. です。

ご両親から愛され、愛してね。ということ。

瀧澤 誰かと誰かを繋ぐ、I Love You、いい言葉だと思えます。ありがとうございました。

（こまつとしゑ／しぶさわけん） 二〇一六年一月七日収録